Los Angeles Times

2018 年 8 月 21 日 | 5:00 AM

これは、ただの丸太？　角永和夫の巨大で繊細な芸術

By SHARON MIZOTA

インスタレーション 「Wood No. 5-CI」、1984、「Wood No. 8-D」、1977、および「Paper 1-BF」、1983 年。　写真（野中隆義）

作家の角永和夫さんの作品は、単に樹皮で覆われた丸太のように見えます。しかしながら、より詳細な検査では、木材は実際には細長い薄い水平の細片（薄板の薄さ）にスライスされ、元の形状に慎重に接着されていることが明らかになった。

作品のスライス（1984 年の「Wood No. 5-CI」と題されています）は、木の輪のようですが、十字の代わりに縦に走っています。数十年の経過をマークする代わりに、これらの層は産業機械の速度と精度で作られました。

ノナカ・ヒル・ギャラリーで行われているこの余分なエレガントな展覧会には、6 つの彫刻がすべて業界と自然の交差点を探索しています。石川県の 1977 年から 1999 年の間に創設され、1960 年代と 70 年代のプロセス主導の芸術を呼び起こし、美学に重点を置いています。角永は仕事を動かし、自然がそのことをすることを可能にします。

1984 年「Wood No. 5-CI」の詳細

1977 年からの「Wood No. 8-D」は、定期的に切開されたものを除いて、床に置かれたもう一つの長い木製のログです。カットが行われると、他の亀裂や亀裂が開いて、プレイヤーのピアノのスコアに似たリズムパターンが表面全体に作り出されました。それは、木の論理に反して人間の論理です。　ギャラリーの反対側では、1983 年の "Paper 1-BF" は 3,000 枚を超える手作り紙の山です。まだ濡れている間に積み重ねられ、紙の片面が圧縮されて、紙が固体ブロックを形成した。他方で、シートを剥がして、柔らかい羽毛の縁を有する膨潤塊を作製した。我々は、どのように同じ物質が私たちの介入の仕方によって異なって振る舞うか、非常に劇的に見る。

最も印象的な作品は、リサイクルされた板ガラスで作られた 1999 年の 2 つの大きな淡い緑の彫刻です。それぞれについて、角永はガラスが溶けて 10 フィートの高さから 2 日間真っ直ぐ細い流れに注いだ。（あなたが見ることができる類似した作品の制作の映像を。）驚くべきことに、ガラスの形はほぼ完璧に、そのフォームやスプレッドガラスの流動の制限によって定義される仏舎利塔のようなドーム、３カ月間固めて冷やすと、各部の重さは 1,000 ポンド以上になります。

1983 年「paper No.1 -BF」1984 年「Bamboo No.1 -B」　写真（野中隆義）

彼らの創造は設計されていましたが、彼らはガラスの本質的な性質、液体から液体への移行、そして脆弱で光るものがどんなに密集し難いのかを熟考するようお願いします。彼らは巨大なロックキャンディーに硬化したスピン海泡のように見えます。角永の介入は自然の美しさと論理に深い感謝をもたらします。しかし、彼らはまた放棄のための隠喩です。私たちはプロセスを開始するかもしれませんが、それは私たちのコントロールを超えて、うねりがあり、予測できない波紋で展開します。

1977年 「Wood No. 8-D」部分　写真（野中隆義）

1999 年 「Grass No.4-I」、と「Grass No.4-L」、

「Grass No.4-I」 の部分、　写真（野中隆義）

ノナカヒル、720 N.ハイランドアベニュー、LA～9 月 8 日; 月曜日は休業となります。
（323）450-9409、www.nonaka-hill.com

Arts And Culture Newsletter
Weekly